

【執筆者の紹介】

大正十三年（一九二四）十一月二十四日生まれる

昭和十八年（一九四三）四月 農業土木技術員として

渡満

濱江省防水開発事業局に奉職、開拓団入

植地並びに入植予定地の土地改良工事に

従事

昭和十九年（一九四四）十月 現役兵として現地入宮

二度転属して満州第一五二六六（六四三〇）

部隊（間島）で兵科乙種幹部候補捕生（階

級伍長）として終戦を迎える

昭和二十三年（一九四八）十二月 国鉄に就職、主と

して工事畑（土木関係）を歩く

昭和五十五年（一九八〇）四月 国鉄を定年退職

軍隊から

シベリア抑留まで

岩手県 金野 秀雄

出生から入隊まで

寒村で育った私は、元氣だけはだれにも負けないほどの腕白小僧で、よく上級生と喧嘩をしたものであった。しかし、家が貧しいだけに家畜の世話は勿論、田んぼや畑に出て、両親の手伝いをし喜ばれた親思いでもあった。

昭和十二年に支那事変が勃発し、間もなく義兄が召集になり、山西省太原の戦場で戦死したとの公報が入り、子供ながら考えさせられたのである。

南京から徐州、そして漢口へと連戦連勝の報に国民は沸き立ち「欲しがりません 勝つまでは」と、文字どおり国民総動員の戦時体制であった。義兄のこともあり、私も志願しようとしたが親に反対され、やむな

く断念、徴兵検査を待つことにし、甲種合格となり、昭和十八年満州第六三三部隊要員として、盛岡北部第二十一部隊に入隊した。

ソ連軍侵攻前

牡丹江省綏陽に駐屯する満州第六三三部隊に入隊したのは同年四月上旬である。野戦工兵隊に入隊したのはダイナマイトを扱った前歴があったからだと思っいるが、体が小さいので訓練には苦勞したが、通信兵として大いに頑張り張り切ったのである。昭和十九年四月と記憶しているが、一〇七師団の工兵第三三九部隊に転属となり、ハルビンに配属になったのである。

その後、富拉爾基にも移駐したが、昭和二十年七月五日、新設部隊の二〇〇一部隊の通称挺進大隊への転属を命じられた。五叉溝の二〇一部隊に兵舎を借りての混成部隊で、師団内各部隊からの転属者である。

大隊長は野村彰大尉、私は大木少尉が指揮する第一中隊に配属となり、第五小隊長奥田見習士官のもとで第五分隊長として任務精勵を志したのである。

ソ連軍侵攻

昭和二十年八月九日早朝、澄みきった青空のもと命令受領のラッパが響き渡った。私は急いで大隊本部に駆けつけた。命令は、ソ連が不可侵条約を無視し宣戦を布告し、満ソ国境を突破し満州領内に侵入を開始せり、師団は五叉溝陣地によってこの敵を邀撃せんとす(その他一つあるが略す)、との下達であった。

命令受領から帰る途中には、早くもソ連の戦闘機が我が兵舎の上空に飛来し、機銃掃射を行ったのである。早速、中隊内各小隊に伝達し、中隊長の命令を待った。勿論、小隊内では戦闘準備を整え、直ちに出勤できる態勢をとった。我が小隊の戦闘装備はまれに見る擲弾筒一基のみで、各人は短剣だけである。新設部隊のため小銃の一挺さえない極めて見すばらしい状態であった。

大木中隊長より命令伝達がなされたのは間もなくだった。その内容によると、奥田小隊長は大隊の兵器受領で師団に赴いている、その外糧秣受領もあり、その間佐藤軍曹の指示に従うべしとのことであった。満ソ国境アルシャン方向から微かな銃声があるようだ。いら

立つ氣を静め、我ながら冷静に兵士たちの決起する氣を静めさせた。

夕方になって糧秣と小銃がやっと渡されたが、小銃は五名に一挺で、更に誠に粗雑な九九式歩兵銃である。手榴弾や爆薬等だが、十分とは言えず、実に心細い限りであった。

中隊長の指揮のもと、兵舎を後に出陣した。その任務は、満ソ国境警備部隊が撤退して来るので、その援護と、追跡してくるソ連軍を一時でもくい止めることである。タコ壺を掘っているとき、ソ軍の偵察機が低空飛行で飛び去ったし、そのとき何発か銃を発射した兵がいたのである。結局、予想した一山違いのルートを侵攻しているとの情報に急遽陣地を撤収し、引き揚げたのである。

五叉溝に師団が集結し撤退行軍を始めたのは、十一日夕方遅くなってからと記憶している。我が挺進大隊は師団の最後尾である。夜を徹しての行軍は、準備不十分もあり、なかなかはかどらない。夜明けとともに敵機が度々飛来し低空から機銃掃射を加えてくるので、

その都度部隊は路外に速やかに疎開し遮蔽しなければならず、行軍は遅々として進まず、我が挺進大隊が西口（シイコウ）に着いたのは十三日午後と記憶している。

その時は既に敵の砲火が断続的ながら熾烈さを極め、戦鬪が展開されていた。直ちに挺進大隊は西口駅前の山を死守せよとの命令を受けて、広い草原とコーリヤン畑を走り抜け山に駆け登ったものの、砲火が激しく作戦の施しようもなく、下山やむなしに至った。このとき、一名の負傷者が出たのが残念でならない。この夜、約六キロほど離れた大和村に敵の戦車や自動車両が五百両ほど集結しているとの情報により、挺進奇襲隊が結成された。

十四日未明の信号灯打ち上げを合図に箱爆雷を抱えて飛び込むとの命令を受け、私もその任に当たるべく中隊長と成功を祈りながら隊員と水杯を交わし勇躍出發した（隊員数、隊長等は記憶にない）が、地形に不案内なことに加え、夜間の行動は特に警戒を要するため慎重を期して行った。友軍の歩哨線を越えるのに苦

勞し、時間ロスが多く、目的地まで三百メートルほどの所で合図の信号灯が打ち上げられ、任務を果たすことができなかった。他隊の六名が飛び込み、勇敢にも成果を挙げたとのことである。

我が隊は引き揚げ各所屬部隊に復帰し、戦闘に参加した。十五日は散発的な撃ち合いであったが、夕方、我が挺進大隊は肉攻配備についた。これは追撃して来る敵の戦車を破壊し、師団の撤退を容易ならしめるためである。

我が分隊は第三線の命を受け配備についた。夜半ごろ、敵の戦車部隊が行動を開始し、広大な草原に十両ほどが並列し、我が軍の肉攻配備の前面に堂々と姿を現し、左右及び中央で絶え間なく照明弾を上げ、更に戦車の後方にはいわゆるマンドリン（連発自動小銃）を肩にした兵士が数名並び、丹念に一斉掃射を行いながら迫って来る状態で手も足も出すことはできなかった。撤退時期がよかったと、その判断に今更ながら満足している。

西口での戦闘は、腹背に敵を受け、圧倒的優勢な敵

火力に押されて、得意の肉迫攻撃も成果が挙がらず、戦況はいよいよ不利になった。

そこで師団は、敵の進出のない興安東省ハマコーザの方向に脱出すると連絡により行動を開始した。この日午後から降り出した雨で道路は泥化し、車両はぬかるみにはまり動けなくなるほどの悪条件の中で、行軍は遅々として進まなかった。十六日、十七日は敵機の飛来も少なく行軍も順調に進んだ。十八日早朝より再び行軍が始まったが、今までの戦闘の疲労と食料不足で落伍者が始まった。草の根を掘って食し、手榴弾で川の魚を捕り飢えをしのぎ、山中の行軍を続けたのである。ある小さな部落の農場でトウモロコシを調達し、分け合って生食した味を思い出す。

もう既にソ連軍の追及はないが、新たな命令が出ない限り与えられた任務に邁進するのが軍人本来の宿命である。八月二十日、我が隊は師団の前衛としてハマコーザを出発し新京に向かった。

八月二十五日、今度は師団の後衛として、また収容部隊の転進を援護しつつ行進中、正午ごろ、号什台に

てソ連軍と遭遇し攻撃を受けた。挺進大隊三中隊はイントールに前進する師団の退路を確保するため応戦し、激戦となり突撃を敢行し、退路は確保したものの、ほとんど戦死したと知らされた。この間、小隊ごとの小競り合いがあったことは言うまでもない。挺進大隊は師団司令部の前衛となり、イントールに向かって前進せよとの命令が出ていた。二十六日朝まで小競り合いはあったが、夕方ごろになって随時各部隊がイントールに集結し、完了したのは二十八日夕方と記憶している。

八月二十九日、既に終戦であることを知り武装解除に応じたのである。五叉溝く西口く号什台の戦鬪で戦死、戦病死などを含め、我が挺進大隊では四七一名を数え、開戦時一、〇一〇名に比し四七パーセントとなる。

終戦

停戦命令が出たのは八月二十九日午後であった。日本が戦争に負けたと、そんな馬鹿なことがあるか、我々は負けてないぞ、様々な会話が飛び交う中、既に十五

日終戦になっていたことを知り、残念であると同時に、何故その後戦争をしなければならなかったのかということである。ある著書によれば、師団司令部の通信器の故障や暗号書の焼却による解読不能で、一〇七師団の存在が分からず捜索に手間取ったのが原因とのことであるが、その後の戦争で多くの戦死者が出ていることを考えると、極めて残念でならない。

終戦を知らず八月末まで戦った。無駄な戦争であるが、組織的な戦いとしては四年間の太平洋戦争最後の戦争であると思う。

武装解除については先に述べたが、将校と下士官、兵は分離されて、ソ連の統制下に置かれたのである。

シベリア抑留地への旅

ソ連兵の監視の下、ダワイ、ダワイと追い立てられて、野宿しての流浪の旅が始まった。強奪が激しく、金銭、時計、万年筆などは全て取り上げられた。その度に隊列は乱れ、放牧地での羊の群れを思わせる様子であった。

イントールから興安まで百二十キロあるそうだが、

何日かかったろう。それからチチハルまでは何キロあるか知らないが、捕虜という屈辱感と、明日の運命もわからず、前途に大きな不安を抱きながら黙々と、羊の追われる群れのごとく、高原、荒野をぞろぞろと歩き続け野宿を繰り返しながら、十月初めと記憶しているが、着いた所はチチハルの兵舎であった。

その日は小雪まじりの雨が降り、夏の服装では一層寒さが身にしみて感じたことを思い出す。野宿から解放されて、開戦以来の兵舎である。だれもが疲労の中にも安堵したようであった。帰国できるかもしれない、否、簡単に帰れるものかと話題が尽きない。そうした中、だれ言うともなく、近いうちに被服が支給されるらしい、との噂が流れ、果たして二日後支給されたが防寒用であり、帰国の望みは絶たれたようであるとなつた。

十月二十日、中開きの有蓋車を丸太で二段にした貨車に乗せられた。貨車の走っている方向が分からない。貨車の中は一段と寒さが厳しい。どれだけの間走ったであろうか。列車が貨車をキシませながら静かに停車

した。

外から戸を叩く、開けるということだろう。重い戸を開けると小雪が舞い、瞬間車内に吹き込んできた。食事受領とのことで、出て見ると満洲里である。

シベリア行きを皆観念し、重苦しい空気になった。祖国日本から何千キロも離れた北の果てまで運ばれ、最早自然の成り行きに任す以外に方法がない。時には引込線で一日くらい動かないこともあった。何日かこうしたことを繰り返しながら列車は走り続ける。貨車が左右に揺れたので二段にした丸太が外れ十二名が落下し、下段にいた同胞二人が犠牲になるという極めて残念な事故があった。二人は運び出されたが、どう処理されたかは推して知るべしである。列車が停車して外から何やら甲高い話し声がある。重い扉を開けると雪で真っ白だ。ここは、チタ州カダラ地区のシベリア鉄道ジプヘーゲンであると説明されたが、我々には分からない。

自動小銃を肩にした監視兵数名が怒声を上げながら駆け回っている。下車を急がせられ線路に飛び降り、

シベリアの一步を重苦しい気持ちで踏みしめた。田舎の小駅だが広場には木材が集積されていた。

下車した部隊は監視兵の「ダワイダワイ」の怒声に追い立てられて、雪の山中を膝から腰まで埋もれながら峠を越え、凍結した道を奥へ奥へと歩き続けた。森林が途切れ、ゆるやかな盆地のような広い所に出た途端、目に入ったのは鉄条網である。ここが我々の収容所スンハラという所であった。

この中に、羊の群れを追い込むように入れられたが、中は雪が積もっているだけで一棟の家もなく、人間生活に欠かせない炊事場も便所もない。

ソ連将校と作業大隊長が何やら話していると、ソ連将校の甲高い声が聞こえ不安を感じた。やがて多くの斧と鋸が準備され、休む暇もなく早速伐採作業である。我々の住む兵舎を建てる材料調達とのことであった。

抑留地生活と労役

スンハラは我々第五一一労働大隊の本拠地である。約六百名ほどがここで、何百年かの年輪を重ねた森林で雪をかき分けて二人組での伐採作業である。

ジプヘーゲン駅近くに分所があり、ここでは貨車への積み込みであるが、無蓋車、有蓋車問わず五十トン、二十トンとあり、かなりの時間が掛かった。特に泣かされたのは、貨車の入る時間が一定せず、夜中だったり、夕方であったり、はたまた早朝であったり、いずれ貨車が入れば直ちに作業開始である。場所の記憶はないが、通称「中の山」と称した所があり、伐採作業が主体で、時にはトラックへの積み込みにも駆り出されたのである。

私は、スンハラ、ジプヘーゲン、中の山でそれぞれ二カ月ずつ強制労働したが、虱が異常繁殖して苦しめられたのである。酷寒の中、栄養不足が加わり、パンを口にくわえたまま死んだ友が何人いただろう。隣に寝ていた友が死ぬとすぐ虱が移動するので分かるのである。

ある日、伐採から疲労困憊しパンにかじりついたとき、ソ連の将校が突然宿舎に来て、怒りを込めて甲高い声で何やらわめいた。通訳によって説明されたその内容はこうだ。今日の伐採で切り株が高いがある、

すぐ現場に行つて切り直せとのことである。明日やるからと理解を求めたが、命令であるとして譲らず、夜中まで掛かつて切り株を再び切ったことがある。こうした山への行き帰りに疲れ果てての死亡者が数知れない。死亡者は丸裸にされ、物置に積み上げられ、何十体かになると馬糞で監視のもと死体捨て場へと運ばれ、雪を掛けて春の雪解けを待つのであろう。

私たちは二十一年四月半ば、中の山を引き揚げ、いったんスンハラに移動したが、七十五名編成だったのが約半分となり、何とか働ける者は十人足らずの状態であった。病弱者百七十人ほどが編成され、小沢中尉の指揮でハバロフスクの病院に入院するということでジプヘーゲンを離れたのは間もなくである。

ハバロフスク市郊外にある通称第一分所と呼んでいる赤煉瓦の立派な二階造りが二棟、向かい合つて建っている大きな収容所であった。(労働大隊名不明)

ここは将校連の収容所だったとか？ 百七十名中何名が入院したのか、しないのか、小沢中尉も収容所に着いた時点で姿は見えなかった。

幕舎生活を何日かして、煉瓦の建物に移つたと記憶している。虱からは解放され、今までとは全く環境が変わり本当に安堵したのであった。

ここでは、反ファシスト委員会があり、厳しい民主化運動が待っていた。軍隊当時の服装だった私たちを食堂に集め、アクチブと呼ばれる日本人が何やらアジを飛ばし、人民裁判と称して自己批判を迫った。私たちは何も悪い事などしておらず、返事に困った。結局は肩章を今なおつけているのがけしからんということ、その場で全部はぎ取られたのである。

翌日には壁新聞に、軍国主義者を追放しよう、などの見出しで貼り出されていたことも思い出す。朝起床と共にアクチブの指示により、各部屋ごと輪番制で、偉大なる祖国ソ同盟、レーニン、スターリンを称賛する言葉を入れてのアジ演説をやらなくてはならず、神経を使ったものだった。

労働は製材所建設とのことで、基礎工事である。三十〜四十センチメートル掘ると、七月末なのに、昔からの凍土であろう、コンクリートにツルハシを下ろし

たごとくで全く受け付けない。ノルマには変わりなしだ。そこで焚き火をして溶かしながら掘ったのだ。製材所工事は途中で止め、今度は収容所近くの丘に労働者用のアパート建設に取り掛かり、二階建て四棟、個人家屋七棟などを建築した。

建築大学出身の女性技師（タマラ）より私は設計図を作業小隊長として渡されたが、理解ができず、通訳と共に随分苦労した。基礎から煉瓦積みやブロック積みなど、ノルマは厳しいが、私人としては勉強にもなった。ノルマは、いつも百パーセント〜百一十パーセントに達していた。ハバロフスク市内の市民家屋の修理にも指名され出掛けたことも何回かあるし、サハリンから輸送されて来た雑穀や白砂糖などの積み降ろしにも行ったが、このころは監視兵も何も言うことなく、人員の把握のみだった。

昭和二十三年四月、ダモイだと言ってナホトカ行きが編成された。待ちに待った日が来た、故郷に帰れる、だれもが胸を躍らせ列車に乗った。気持ちには既に我が家に帰っている。話題は美味しい物をタラフク食いたい。

一日も早く満腹感を味わい、親兄弟、妻子に会ってゆっくり休みたい。楽しい夢を乗せた列車は、いつの間にかナホトカ駅に着いた。帰国時には第一分所から第三分所までにその手統を経て帰国の途につくと聞いていたので、専ら皆がその気になっていた。

ところがダモイは真っ赤な嘘で、今までの作業内容によって編成替えがあり、各分所に転属されることになって、だれしもがガツカリ、無言だった。私は、十五名の友と共に教育を受けることを命じられ、三カ月間受講した。内容は、レーニン、スターリン主義、唯物論等、多岐にわたった。早朝から夜遅くまで徹底した詰め込み教育である。教育終了した六月末に、第一分所から約四キロほど東南の山の中にある第六分所に配属になった。この分所はナホトカ港の引揚船用棧橋建設が主作業であるが、埋め立て用の石切り運搬、一輪車（ターチカ）で埋め立てたのである。反ファシスト委員会で労働部を担当した私は複雑な思いであった。

特に引揚船が入港し、帰国する同胞から「元気でナー」「元気で帰って来いヨー」「怪我するなヨー」との励ま

しの叫びはいまだに耳の奥に残っている。こうして同胞を何船見送ったろうか？ 眼に涙を潤ませながら、皆で万歳を何度も祈りを込めて唱えたのである。同胞が帰国している現実には、我々にも必ず来ると皆で励まし合ったのであった。

抑留者の統制管理

当初は、戦勝国として威厳を示す必要もあつたかと思うが、自国軍部の統制管理ができず、捕虜として人間離れの威嚇管理であつたのではないかと思う。

同時に、作業能率を高めるために、将校に帯刀を認め指揮を執らせる。その方が、言わばソ連には都合が良かったのではなかつたかと思われてならない。ジプヘーゲン当時からの見解である。ハバロフスクからは将校は分離されソ連の教育を受けた。アクチブと言われる人々によって統制され、運営管理も日本新聞の指導に任されていたと感じている。こうした人々が果たした役割はいろいろな面で、プラスマイナスは別として、大きかつたのではないかと思う。

抑留生活と極限状態における意識

食料不足による栄養失調、酷寒下でノルマと監視兵に追い回されての強制労働、虱や南京虫との闘い。これらによる回帰熱媒介、パンを口にしたらま死んだ友、監視兵に射殺された同僚など、極限状態はいつでも、どこでも、だれでも経験し、自分の目で見ていただけに、今度は俺の番かと思つたに違いない。

体力のさほどない私でも、絶対帰国するぞとの信念と気力だけは欠かすことがなかつた。

帰還

ナホトカを出発した日時は記憶にないが、昭和二十四年九月二十四日、「明優丸」で舞鶴港に上陸、七年余にして日本の土を踏みしめたのである。

帰国後の生活

昭和二十五年、鉄鋼業の社員に採用され、定年退職し、その後、金融機関に五年勤めた。

【執筆者の紹介】

現住所 釜石市小川町一―五―二二

昭和十三年 飛行機製作所

同十五年 第一産業(株)

同十八年一月 入隊

同二十四年九月二十四日 舞鶴上陸

同二十五年 鉄鋼業就職

同五十四年二月 全抑協若手県連結成に尽力

常任委員 釜石支部副支部長

(岩手県 田辺 壮久)

六割も死んだ地獄ラーゲル

石川県 松 田 春 雄

(旧姓 北村)

私は関東大震災の大正十二年、石川県松任市に生まれた。当時は出城村竹松浜という戸数七軒の集落で、本村の竹松から二キロも離れた海辺である。小学校から高等二年を卒えるまで八年間、四キロの田圃道を出城尋常高等小学校へ通いとおした。村からの同級生は男三人。今日も達者でいるのは、暇さえあれば砂浜で遊び回ったお陰であろう。

学校を出て時局柄、海軍へと志望していたが、先生に説得された父の奨めもあって、近くの県立松任農学校に入学した。

農学校では三分の一が実習で、味噌や醤油、筍の缶詰作りなど、私の青春時代で一番楽しい三年間であった。

いざ就職となつていろいろ迷つていたところ、松任出身で満鉄の撫順炭鉱に在勤中の宮本常次郎さんがたまたま帰省されて、農学校出身者を是非一名と学校に依頼があり、お鉢が私に回つてきた。『海外雄飛』が高唱されていた時代でもあり、先輩もいる満鉄ならと、私も決心してお世話になることになった。

昭和十五年三月二十日、満州国撫順炭鉱西製油工場に入社。徴兵前の青少年で青年隊が組織されており、全員青年塾に入寮という軍隊生活に準じた厳しいものであった。大東亜戦争開幕の朝は、塾の横の氷結した蓮池の上を一直線に走つて撫順神社に参拝、戦勝祈願をしたが、真っ青に澄んだ空が今でも臉に焼きついてゐる。